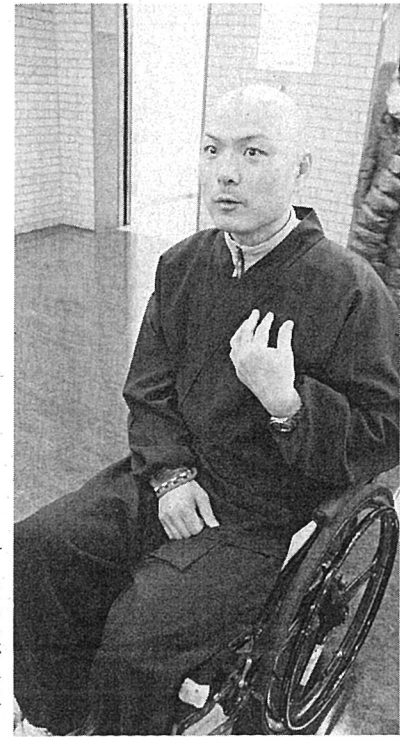


「立ち直る途中、見せよう」

臨床宗教師・2期生
大けがで返上考えた

高野山真言宗
羽富隆照さん



「私はまだ立ち直る途中」
と語る羽富さん

絶望からの気づき

2012年から始まった東北大の臨床宗教師養成研修で、これまでに延べ126人の臨床宗教師が誕生したが、その中で一人、「臨床宗教師の返上」を考えた宗教者がいる。大阪府羽曳野市の高野山真言宗僧侶、羽富隆照さん(39)。同大の

養成研修第2期生として活動中、事故で大けがを負って車椅子生活となり、「絶望し、自死を図ったこともある」。

3カ月後に事故で右半身にまひが残る大けがを負い、車椅子生活を余儀なくされた。事故からしばらくは耐え難い激しい痛みで七転八倒。信だけでは克服できない身体的苦痛がいやなく心をむしばみ、2度、自死を図った。

その後、今年1月まで過ごした大阪府内の障害者自立支援施設で、事故や病気などで障害を抱えるようになった同じ境遇の人々と励まし合いながら少しずつ前向きになっていったが、臨床宗教師に復帰する気持ちにはなれなかった。

「宗教者アレルギー」になっていった。ある僧侶が「これも修行だね」と慰めてくれたが、「それ

なら、みんなもしてみよう」という気持ちになった。たった一言で宗教者からケアを受けたとは思えなくなった。

2月28日に臨床宗教師の全国組織「日本臨床宗教師会」の設立記念シンポジウムが、京都市下京区の龍谷大学で開かれた。気乗りしないまま法衣ではなく、スーツ姿で出席。「臨床宗教師を返上するつもりだった」という。

会場に着くと、東北大での研修やその後フォロアップ研修を通して懇意にしていた、日本臨床宗教師会の金田諦應副会長と九州臨床宗教師会の吉尾天声氏、糸山公昭氏が声を掛けてくれた。

「私はまだ立ち直る途中」。そう訴えると、3人から「立ち直る途中」の姿そのままでもできることがあるのではない

か、と問い掛けられた。「人に寄り添うために自分はハンディを与えられたのだ」と初めて気づいた。「今も『宗教者アレルギー』が完全に拭い去れたわけではないが、私にとっては3人から言われたからこそその気づきだった」

記念シンポから2日後の3月1日、宗教者有志が京都市内で行った自死問題の啓発パレード「LIFE WALK(ライフウォーク)」に羽富さんの姿があった。

「宗教者であっても死にたいほどの苦しみを抱くことがある」。そんな思いを伝えたかったと語り、言った。「たった一人でもいい。苦しみを抱えている人がいれば、勇気を持って外に出て、この『醜態』をさらしたい」

(池田 圭)